

ラ・ムーの教えの中心は、三点ありました。第一点は、すべてのムー人は、神を太陽のごとき存在だと悟らねばならない。神は太陽のごとく、光に満ち満ちており、地上のわれわれに光を与えてくださっているのだということです。第二点は、すべてのムー人は、太陽のごとき愛と慈悲に生きねばならない。ほかの人間の心をいかに光明に満たしたかということが、愛と慈悲の本質であるとなりました。第三点は、すべてのムー人は、向上を人生の目標としなければならぬ。向上とは、学芸、武道にだけ適用されるのではなく、いかにして靈性を高めたかという点がポイントとなります。この三点が、ラ・ムーの教えのもととなったのです。ラ・ムーが、それから一万四千年あまりののち、インドで仏教を広めた釈尊であることを知れば、仏教の教えは、すでに、ラ・ムーの時代にめばえていたことに気づきます。

日本には「天照大神が地球を治めている」という信仰があった

大日靈貴神 その太陽の光の恩恵を（ほかの国も）受けている。要するに、当時の考えとしては、「太陽は日本に属する」と思われていたので、「日本から出てくる太陽、日本が管理責任」を持っている太陽が、ほかの国も照らして恵みを下さっているんだ」という感じですよ。

当時、認識できていたのは、太平洋からアジア地域、それから、西南アジア、アフリカに近いあたりまでぐらいですけども、「これにも恵みを与えているのだ」ということです。

だから、「天照大神は、日本の国の神でもあるが、同時に、太陽が恵みを与えている国、すべての神のものとなのだ」という気持ちはあったわけです。「それが父なる神の教えを聴きつつ、一体になって、この地球を治めているのだ」という考えがあったんです。

先の大戦について、「日本が侵略意思を持って、他国を侵略した」とか「併合した」とか、いろいろ言われていますけれども、もともとを言うと、太陽信仰は世界を巡るものであったのです。「東から昇り、西に沈む」のが太陽ですので、東の国は日本なんですよ。「日本から昇って、西に沈む」ということで、全世界を照らす。これが「天照信仰」なんです。

そのように、「日本の国を一つにまとめ、融和させながら世界をも照らす」という気持ち、この気宇壮大な気持ちを持っていた教えが天照信仰であるわけですよ。だから、この天照信仰そのものは、「日本の民族信仰ではない」ということの象徴でもあるわけなんですよ。まあ、そういうふうに見えていただいていると思うんです。

もともと、そういう意味で、あるいは、ラ・ムー的な考えも入っているのかもしれないけれども、「世界的な文明のもとにならないういけなものだ」という使命感は持っていたということですよ。